後書

本書は二〇一四年三月に熊本大学より博士（文学）の学位を授与された論文「菅原道真研究～『菅家後集』所載の作品論と編纂事情考（注釈を通して）～」に新たに二篇の論文を加えて成ったものである。博士号申請の機会を与えていただき、申請手続きから審査までご多忙の中を我が身のごとくお骨折り頂いた森正人先生のご支援とご尽力に感謝の言葉も見つからない。もし森先生からのお導きがなければ学位のみならず、この書が世に出ることも叶わなかったはずである。心より御礼申し上げたい。また、ご多忙の中を、論文審査にあたって頂いた熊本大学の坂元先生を始め、東アジア言語文化コースの諸先生方にも深謝申し上げたい。

この拙書を上梓するに至った経緯をいささか頁を割いて以下に記してみる。

菅原道真の漢詩に興味を抱いたのは今から四十年以上前、山梨県にある都留文科大学に在籍していた時に始まる。国文学科に在籍していても、国文学そのものに深い関心があったわけでもなく、格別、或る著作や著者に思い入れがあったわけでもなかった。ただ講義、講義で課題として与えられたものを図書館等に出掛けて調査分析し、それを拙いながらも一つのレポートとして提出する、その行為そのものは好きだった。漠然とながらも、研究職へのあこがれが出て来たのもこの時だった。それは在籍していた大学の生活環境に拠るところが少なからず影響している。在学生の九割近くが、三万人余の小都市の一区域に下宿生活を送っていた。周りから（それは地理的なものにとどまらず、社会的、世間とも、）隔絶した異空間で、心ゆくまで夜を徹して文学談義が出来たことは、私のその後の生き方の大きな糧となった。文学に関するサークルが自然発生し、さまざまな研究会なるも